

# 作家の肖像

## 第1回

このコーナーでは、  
毎回一人の作家を取り上げ、  
美術評論家の酒井忠康先生に、  
お話をうかがいます。



## 1912-48 松本竣介

まつもと・しゅんすけ  
本名は佐藤俊介。1912年東京都生まれ。2歳のときに岩手県花巻に移り、のちに盛岡で過ごす。13歳のときに、流行性脳脊髄膜炎が原因で聴力を失う。17歳のときに画家を志して上京。23歳で二科展に初入選する。その翌年、松本禎子と結婚。1943年、友人の麻生三郎・巖光らと新人画会を結成。1947年、自由美術家協会に参加。1948年、36歳で死去。

## 意思を込めた「線」

画家・松本竣介の三十三回忌にあたる1980年、私にご家族から『TATEMONO』と題された小さなスケッチ集をいただきました。生前、彼はこのような小さなノートを持って、くたくたになるまで街を歩き、ペンを走らせていたそうです。

彼が描く線は、とても身体的で躍動感があり、観る者の心をとらえます。しかし、決して感情的な線ではない。無駄がなく、「意思」を込めた線です。それは、竣介の性格もあると思いますが、彼が聴覚を失っていたことと、どこかで関係があるのかもしれない。

しかし、なぜ竣介は、これほどまでに街へ出て、スケッチをしたのでしょうか。彼には、電車や自動車の音が聞こえない。ある意味これは、都会の喧騒けんそうの中を、孤独な散歩者のように通り抜ける竣介を想像させます。日常でも複雑なコミュニケーションには筆談を欠かすことができなかつたと言われていました。そんな竣介ですから、普通の雑談を細かく理解するのは無理だったでしょう。雑談のようなあいまいな空気がわからない竣介は、そこに自分の限界があると、感じていたのだと思います。だからこそ、雑踏に身を置き、街を描いたのではないのでしょうか。

## 永遠の青年像

竣介の代表作の一つに、1942年に完成した「立てる像」があります。このころ、日本は太平洋戦争の真ただ中で、この作品は戦争への「抵抗」を表していると評されることが多いようです。しかし、私はそうは

思いません。

20代のころ、勤めていた神奈川県立近代美術館で「立てる像」と向き合ったとき、私は、何とも言えないすがすがしさを覚えました。一人の画家が真実を伝えようと、すつくと立ち上がる姿が見えたのです。光り輝く生命の尊さ、そのようなことも感じました。竣介は、戦争という大きな矛盾に「抵抗している」のではなく、「向き合っている」のだと、そのとき強く思いました。

いま改めて、この絵を観てみると、少し照れくさく感じますし、「そんなに頑張るなよ」と声をかけたくないのでありますが、若いころは、この絵に魅了されました。「立てる像」は、若者を惹きつけてやまない、永遠の青年像だと思います。

36歳で早世した竣介を、親友である彫刻家・舟越保武ふなこしやすたけは「水晶のような男だった」と述べています。私も竣介の作品からは、不思議と透明感のある、すがすがしい空気を感じます。

意思を込めた線と、すがすがしさ。それが彼の魅力ではないでしょうか。(談)

## 酒井 忠康

さかい・ただやす  
世田谷美術館館長、美術評論家。  
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。  
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。  
平成24年度版光村図書中学校『美術』代表著者。

2012年は、竣介が生誕して100周年。  
全国各地で回顧展が行われます。

## 「松本竣介 生誕100周年回顧展」

2012年4月中旬より  
岩手県立美術館(盛岡市)で開催。その後は、  
神奈川県立近代美術館(三浦郡葉山町)、  
宮城県美術館(仙台市)、  
島根県立美術館(松江市)、  
世田谷美術館(東京都)と巡回予定。



上／「立てる像」  
キャンヴァス 油彩 162×130cm 1942年  
神奈川県立近代美術館蔵

右下／「TATEMONO」  
竣介が外出時に持ち歩いていたスケッチ帳を復元し制作。  
三十三回忌にあたり、故人の近い人々へ贈られた。

左下／「街」  
板 油彩 131×163cm 1938年 大川美術館蔵